

日本海から 瀬戸内海への山旅

平均 68.8 歳が開拓した兵庫縦断トレール

アルペン^{ろさん}芦山／兵庫 市居 よね子



アルペン芦山は、1966（昭和41）年に「芦屋勤労者山の会」として発足。現在の会員数約70人、平均年齢は66歳。阪神・淡路大震災のときは事務所が倒壊したが、芦屋川河畔に再び事務所を構えて活発な活動を続けている。創立50年、文字通り山あり谷ありを団結で乗り越えてきた。50周年記念行事の一環として行われた兵庫縦断トレールを報告する。

※トレール企画スタッフ
戸田祐一 辻本雅夫 尾村隆一 市居よね子

ルートが完成。小赤壁の海岸で、日本海で汲んだ海水を瀬戸内海にそそぐ

なぜ兵庫縦断トレールか？

記念事業として会員だれでも参加でき、登山としても値打ちのある山行を考えると、「日本海から瀬戸内海へのトレールを作ろう」という計画を立てた。兵庫県は、日本海と太平洋（瀬戸内海）の両方にまたがった県。全く異なる日本海側と瀬戸内海側の山々を結んで歩くトレールを開拓するのだ。

出発点は加藤文太郎の生地、浜坂海岸。ルートは、①兵庫県最高峰の氷ノ山を通る ②9区間に分け、順番を問わない ③日本分水嶺をできるだけ通る ④車道は極力避け登山道、林道は利用する。藪尾根を辞さない ⑤世界遺産の姫路城を通り、瀬戸内自然海岸の「小赤壁」を終点とする。以上を基本方針に約1年かけて挑んだ。予想通り北部は難関だったが、南部にも意外な伏兵が潜んでいた。

無事ゴール！

2015年11月21日に日本海・浜坂を皮切りに始まった縦断トレールは、2016年10月9日に姫路の小赤壁公園でゴールした。海岸に下りて浜坂で汲んだ日本海の水を瀬戸内海に注いで全コース完成のセレモニーを行った。

皆と喜びを分かち合った乾杯のビールが五臓にしみわたる。

参加者は実人員で38人・延べ137人と全会員の半数が参加。最高齢89歳、最年少48歳。参加者の平均年齢68・8歳であった。山行回数は12回、18日間。延べ標高は8000m以上。コースの内訳は、歩行時間ベースで登山道が30%、道のない敷が50%、林道13%、車道7%である。山間ルートを開拓する狙いは達成できた。

アクセスの困難を乗り越えて

トレール縦断の困難さは山を歩くこととはもとよりアクセスにもあった。出発は必ず前回の終了点に戻ることから始まる。スタートの浜坂から内陸部に進むにつれて担当者はアクセスに頭をひねった。

神戸・三宮からバスで湯村温泉へ、さらにジャンボタクシーで海上に入ったり、JR八鹿からバスで奥若杉へ、さらに宿泊先の車で若杉峠まで送ってもらったこともあった。反対に氷ノ山を縦走後、若杉峠に下りたときは奥若杉のバス停まで1時間車道を歩き、最終便のバスでJR八鹿駅に出た。ようやく車道に下りても雨の中をバス停まで1時間以上歩いたこともある。田舎

ではバスは本数が少ないのでいつも綱渡りだ。

藪こぎの連続 求められる地図読み

通算4日目は日本分水嶺・氷ノ山(1510m)に向かって、諸鹿越から東因幡林道に入り4時間歩く。桑ヶ峠から急勾配の藪の中の登りになる。木の根にしがみついて赤倉山へ。下山は頭上まで伸びた根曲がり竹の藪こぎになる。笹中を必死に泳いでようやく一般ルートに出たが、しばらく倒れ込む。水汲みにも時間がかかり氷ノ山越の小屋に泊まる(行動9:5時間)。

とうとう道迷いに

しばらく右に左に。やがて踏み跡らしきものを発見。しばらく苦労したが、次第に明瞭な尾根になる。新緑が美しく快適だ。藪はないが森林帯で見通しはなく、際立った山もなく地形図で現在の読み込みは難しい。所々にある杭が目印になるが、行政境界杭、国土調査の杭、地積調査の杭と混在しており、頼るととんでもない方向に行く。GPSは最後の最後に見ることにした(行動11:5時間)。

通算5日目は氷ノ山に登り爽快な気分であぐらコースを下りたが、分水嶺の尾根に入ると一気に藪になる。広い尾根で主尾根が不分明だ。GPSで見ると標高1126mを過ぎて東の尾根に入っていた。引き返し、雑木林の中を

通算8日目は富士野トンネルから笠杉峠まで無名の峰を次々越える地味なコースだ。おまけに雨模様で稜線付近はガスっており、ピークは強風だ。トンネルから見つけておいた斜面をかすかな踏み跡を強引にたどる。三角点のある量見山(786m)からの折れ曲がりに気を使う。間違えると他へ行っ

てしまう。周辺地形で現在地を確かめ、尾根の方向を慎重に読む。先に目指す山稜が続いているか、尾根の広さや斜度は間違いないか。びったり合ったら喜びがこみ上げてくる。地図読みの醍醐味である。

ただこの日は山行3日目で、疲れもたまってしまった。強風と雨も本降りになる中、下りでついに間違えた。もう一度ピークに戻り、周辺をよく捜す。長い頂上台地のどこにいるのかが分かりにくい。台地の別の地点も確かめ、アセビが茂った先に稜線を見つけた。テープもある。GPSで現在地を確認する。笠杉トンネルまで急傾斜地を下り、国道に出てはっとしたもの、携帯は頼みのドコモも通じず、結局軒子畑の集落まで歩くことに。民家の軒下で雨宿りしながらタクシーを待った(行動9:5時間)。

もないので、まず小畑トンネルより雪彦山に登り北上し、その後同じルートを下山しようとしたが、道迷いが発生して時間切れになった。やり直して他日雪彦山から小畑トンネルまで南下した。

ダニの攻撃にもめげず完遂

通算16日目になる6月18日はすでに初夏の気候。夢前川西岸の低い連山經由で雪彦山に登ろうとした。しかし、異常な高温、猛烈なシダの藪、さらにダニの攻撃に途中でギブアップ。書写山は諦めて車道を歩いて玉田バス停へ。帰宅後調べてみるとダニに数十カ所やられていた。

ゴール

一つの目標に向かって困難を乗り越え1年がかりで縦断トレイルを成し遂げる。参加できなかった会員も未踏の縦断トレイル開拓の成功を喜んでい

る。これからも協力して「安全に楽しい登山を続けよう」と会員の心が一つになった。それは、「アルペン芦山の歌」にもつながる。「♪芦屋を下に はるか見て 岩肌恋し 風吹きの サイルをさばく山男 アルペン芦山♪♪」



赤倉山を草の根にしがみついて登る



笠杉峠の手前の頂上台地で雨の中、現在地を確認する



殿下コースの下部。不分明な尾根を探す